



ショートコメント

★★★

Data 2023-97

## 658 km、陽子の旅

2022年/日本映画

配給：カルチュア・パブリッシャーズ/113分

2023 (令和5) 年8月19日鑑賞

シネ・リーブル梅田

監督：熊切和嘉

脚本：室井孝介/浪子想

出演：菊地凜子/竹原ピストル/黒沢あすか/見

上愛/浜野謙太/仁

村紗和/篠原篤/吉

澤健/風吹ジュン/

オダギリジョー

### みどころ

タイトルをただでロードムービーであることがわかるが、熊切和嘉監督が菊地凜子を主演に起用した本作は、古くは『幸せの黄色いハンカチ』(77年)、近時は『ノマドランド』(20年)等の同種の名作にどこまで迫れるの？

陽子の故郷・青森への旅はひょんなことから始まったが、それが突然ヒッチハイクになる脚本にはアレレ……。さらに、青森への658kmのヒッチハイクの旅で出会う男女は1組の老夫婦を除いて、“変な奴”ばかり。陽子の変な女(?)だから、そこには、変な男女ばかりが集まってくるの……？

自己を喪失したアラフォー女が故郷への旅で新たな人に出会う中、自己再生していく素晴らしいロードムービー！そんな風に持ち上げる評論もあるが、私にはとても、とても……。こんな愚作、駄作にはうんざり！

— \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \*

◆上海国際映画祭で最優秀作品賞・最優秀女優賞・最優秀脚本賞の3冠を受賞！主演は『パベル』(06年)で米アカデミー賞助演女優賞にノミネートされた後、私の目には“鳴かず飛ばず”だった(?)国際派女優・菊地凜子！そう聞くと、こりゃ必見！

冒頭、暗いトーンのスクリーンの中で、1人でパソコンに向かって座る42歳の独身女・陽子(菊地凜子)の姿が登場する。陽子は18歳で故郷の青森から上京したものの、就職氷河期の中で思うような仕事にもありつけず、そうかといって、玉の輿に乗ることもできないまま、暗い暗い“ボッチ生活”を営んでいるらしい。そこにいきなりドアを叩いて入ってきた従兄弟の茂(竹原ピストル)から、「故郷の父親(オダギリジョー)が死亡し、明日出棺だから一緒に青森へ行こう」と言われた陽子は、最小限の荷物だけ持って茂の車の中に乗り込むことに。なるほど、だから本作のタイトルは『658km、陽子の旅』なのか！

すぐにそう納得できたが、本作は、ロードムービーの傑作『ノマドランド』(20年)、『シネマ48』24頁)やカンヌ国際映画祭で脚本賞を受賞した濱口竜介監督の『ドライブ・マイ・カー』(21年)、『シネマ49』12頁)のように、いろいろと面白い仕掛けがあるはずだ。一

方でそう期待しつつ、他方で熊切和嘉監督作品と聞くと少し不安も・・・。

◆人生に傷つき自己を喪失する中でも、旅に出れば、新たな人との出会いや自然との触れ合いによる新発見があり、自分を見直すことができる。そのため、良質なロードムービーでは旅は必ず、自己再発見の旅、自己再生の旅として前向きに描かれることが多い。すると、本作は、冒頭に見たような、菊地凜子演じる“人生の瀬戸際女”が、東京から青森への658kmの旅の中で“自己再生を果たす”前向きな物語！？もしそうなら、それはそれでいいのだが、TSUTAYA CREATORS’ PROGRAM 2019 脚本部門審査員特別賞の受賞作たる本作の脚本は如何なる“ひねり”や面白さが・・・？

◆そう思っていると、陽子は最初に休憩したパーキングエリアで茂とはぐれてしまうというハプニングに遭ったからアレ・・・。しかし、これは一体なぜ？今ドキの日本では、こんなバカなことが起きるはずはないのでは？

たしかに、出発前の会話の中で、陽子の携帯が壊れているという“前提”は設定されていたが、日本には公衆電話があるし、もしそれが見つからなければ、誰にでも「〇〇の事情なので、ちょっと携帯を使わせてください」と頼めば、ほとんどの人は使わせてくれるはずだ。そして、それなら、陽子が茂の携帯に連絡をすることは容易なはずだ。

本作では、茂が青森の実家に電話をして、「もし、陽子から電話があれば〇〇のパーキングエリアで待っていると伝えてくれ」と話していたが、そもそも本作は、そんな最初の設定からして、ナンセンス！

◆携帯を持たない陽子の今の所持金は約2500円。そんな状態での陽子の選択は、そのまま何らかの方法で明日の出棺までに間に合うように青森へ向かうのか、それとも東京に戻るのかということだ。

そうすると、18歳の時に東京に来てから20年以上も故郷に戻っていない陽子の選択は、きっと後者になるはずだ。しかし、それでは映画にならないから、脚本はそこから“ヒッチハイク”という方法で青森を目指す、という設定にしているが、私に言わせれば、これもナンセンス！

◆若き日の武田鉄矢と桃井かおりが、天下の高倉健と共演した山田洋次監督の『幸せの黄色いハンカチ』（77年）は素晴らしいロードムービーだった。それに対して本作は、ボソボソ声で話しかけてくる、いかにも曰く因縁ありげで陰気なアラフォー女・陽子を車に乗せてくれる数名の男女のキャラの面白さと、そこで繰り広げられるエピソード（だけ）が“売り”になっている。

とりあえず、陽子を車に乗せてくれたカップルや拒否する男女を除き、本作の柱となる

エピソードとなる形で登場する人物は、①あくまでマイペースで自分の喋りを一方的に聞かせるシングルマザー、②いかにも訳ありの1人でヒッチハイクをしている若い女、③自分はライターだと正直に自己紹介しながら、合理的な選択として肉体関係を迫る男、④青森の近くに至ってやっと出会った“まとも”に陽子に乗せてくれた親切な老夫婦だが、時系列に沿って、そんな1つ1つのくだらない(?)エピソードを展開していく本作に、いい加減うんざり!最後の老夫婦を除いて、ヒッチハイカーの陽子がバカなら、そんな陽子に乗せる男女もバカばかり!

◆私は本作のパンフレットを購入していないが、本作については3つのネタバレ情報を含むネット記事を読んだ。そのうちの2つは「ヒッチハイクで自分の殻を破るヒロイン」と称賛するものなど、私には読むに値しないものだった。他方、「そんなには褒めないよ。映画評」だけは、本作に対して、①ラスト10分間の映画・・・、②このシナリオが受賞作・・・?、③亡霊は何も語らず・・・、等の疑問点を率直に述べているので、私はこれに同感!

その他、本作についてネット上に見る映画短評では「人生を諦めた氷河期世代の再生を描く静かなロードムービー」、「すっぴん菊地凜子と冬の旅はよく似合う。」、「「北」に向けて心が解けていく内省のロードムービー」、「『ケイコ目を澄ませて』に通じる秘めた熱量」等の褒め言葉を見ていると、これにもうんざり!

2023 (令和5) 年8月21日記